

まぶしいくらいよく晴れた日のこと、14歳^{さい}のファイロウは農具を馬に引かせて、じゃがいも畑^{たがや}を耕^かしていた。広い畑にただひとり、考えごとをするにはもってこいの仕事だ。行ったり来たり、行ったり来たり……農具は一度に何列も土をほり返して行く。ファイロウがふり返って見ると、平行な線^{むすう}が無数にならんでいる。

ファイロウはもう少しで御者台^{ぎよしゃだい}から落ちそうになった。ああ、これだ、これでテレビジョンがつくれる！ ファイロウの目に映^{うつ}っていたのは、ほり返された土の列ではなく、テレビジョンをつくる方法^{ほうほう}だった。画像^{がぞう}を分解^{ぶんかい}して平行な光の線^かに変え、それを電気信号^{しんごう}にして送り、ふたたび光にもどして見る人に届^{とど}ける。すべてを高速でおこなえば、目の錯覚^{さっかく}を利用して、光の線ではなく、もとの画像^{がぞう}を見せることができるはずだ。使うのは電子だ。機械^{きかい}みたいに部品を動かさなくてもすむ。

ファイロウは顔をほころばせ、じゃがいも畑でひらめいたことをお父さんに話した。でも、お父さんには息子の言っていることがさっぱりわからなかった。

